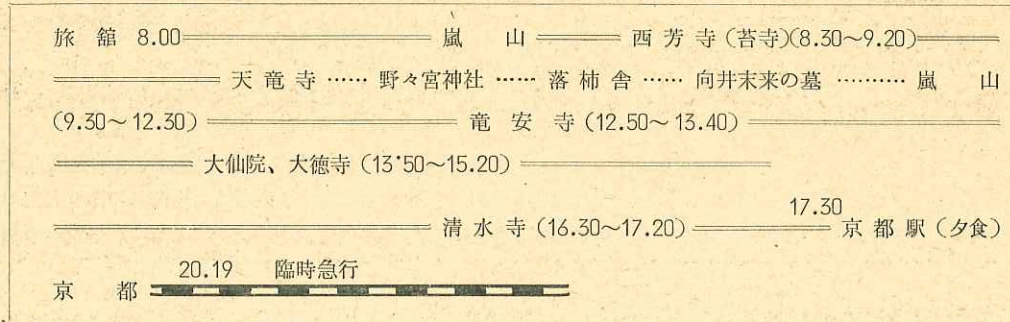


3月11日 (月曜日)



【食事】 昼食 嵐山 夕食

【宿泊】 車中

(注意事項)

- ※ かならずしおりも持って見学をすること
- ※ バスは前日と同じ京阪バスです。この日は、特に専門のガイドさんが来ますから、よく聞くこと

西芳寺 苔寺の庭とよばれている。設計者は不明であるが、鎌倉初期の作。五十数種といわれる色々な苔でおおわれ黄金池という池をいただく平安朝の匂いのする庭である。木立の中に有名な茶室湘南亭がある。

この池をめぐる山みちをのぼると、そこには枯山水の岩組がある。おちる水を思わせる滝石組、石、石。石は千古の色をして深く、重く、そして寂かである。耳をすますと、何処からか添水(そうず)の音がきこえる。即ちここは上下二段式の廻遊式庭園である。

しかしまず、この寺の前を流れる細谷川にかけた橋をわたり、山門を入ると土塀がせまる。瓦葺きの屋根、河原石を積んだ土台、その間の白い壁。苔と白との調和音に、ひしひしと京都を感じる。

嵐山 大堰川(おおいがわ)にかゝる橋の名は渡月橋。らんかんに寄り、流れをみると、水面には嵐山の影をやどしている。瀬の音が耳にさわやか。

京中の寂しさをとりあつめても嵯峨の秋には及ばざりきな 吉井 勇

これからその嵯峨野にはいる。

天竜寺 この寺は後醍醐天皇崩御のあと、足利尊氏が夢窓国師に請うて創建したもの。ここの庭も、作者は不明。鎌倉中期の作、亀山を背景として作られたこの庭、方丈前のひろい白砂。その間にひろがつた曹源池、池中、池畔に組まれた石組の素晴らしさは音楽を聴くおもしろい。枯滝の前の石橋は現存している庭園の石橋中最古のもの。方丈と書院とのかぎがたの長い廊下を、行き来して観るこの庭の景は心にしみてくるのを感じる。ここの庫裏の入口上の木組も、竜安寺のそれと同様美しい。

野々宮 むかし伊勢神宮へ齊宮(いつきのみや)としてえらばれた内親王が、ここにこもつて潔斎したところ。ささやかな境内には「黒木の鳥居」と「小しばがき」がものさびて、その名ごりを今にとど



めている。

この静けさ、これが嵯峨野のそれである。

しかし京都は、年一年と、こわれつつある。淋しいが、こわれつつある。

わたしたちはこの嵯峨野を、しばしまよいたい。そしてこの京だけが持つ気分、しばらくをしりたい。それはまた、心のふるさとへかよみちでもある。

落柿舎 蕉門十哲の一人。向井去來の草庵。

出入口の外壁には、あるじの留守と在宅を示したという名ごりを伝えて、みのと笠が今もかけられている。庭に一本の柿の木がある。玄関の障子にその影をおとしている。近くのけやき林の墓地の中に、小さい自然石に「去來の墓」とだけ書いた彼の墓がある。二尊院は、すぐ近くである。山門に「二尊院」と肉ぶとに書いた札がかかっている。立派な字である。山門をくぐると、参道の両側に楓と松を交互に植わした並木が、ずっと続いている。秋は楓が紅葉して、松の緑に映えて美しい。

祇王寺 竹林の間の坂道を左にゆるく曲つたところに草庵がある。それが祇王寺である。

清盛の愛を一身にうけていた祇王は、佛御前の出現で、清盛の愛はたちまち佛に移つた。人の世のはかなさを、身に深く感じた祇王は「萌え出づるも枯るるも同じ野べの花いづれか秋に逢はで果つべき」と障子に書きのこして、この嵯峨野の奥に逃れて、尼になり念佛三昧の生活に入つた。数年してある夜、おとなうものがある。それは佛である。佛もまたいつかは同じ運命になると観じ、髪をおろし、祇王親子とともにこの庵室で、念佛の世界に入つて世をはてた。平家物語に、こうかたられている。庵室の右手、楓の木立の中に一本の山桜がある。これを祇王桜という。下は苔におおわれて、土はみえない。

玄関に、小さな鐘がさがっている。おとなう人は、それをたたいて知らせる。ここの庵主（あんじゆ）は、昔ながらに尼である。

竜安寺 貝音で、りょうあん寺とよむ。ここの庭は室町末期の作。

山門を入つて、広い池（鏡容池）を左手に見ながらすすむ程に、美しい石でつくつた緩、急の石段にたどりつく。そのつきあたり、この寺の庫裏（くり）がある。見あげると、切妻破風の、木組と壁とのかなでる白と黒との階調。まず目をみはる。

ひやりとする、広い板張りを左に曲ると、そこに庭がある。写真で幾度も見たであろうその庭が。それを今、この目で見るのだ。その瞬間、心に「あつ」と叫ぶであろうこの庭。しきつめた白い砂、閑。大小十五の岩の枯山水、寂。閑寂とは、この気をいうのであろうか。それとも、幽といおうか。樹一本もないこの庭をくぎる、油を入れて土を練つて作つたといわれる低い塀。そして、その色。

この広縁に、じつと坐つてみつめてみると、大勢でいても独りである思いに引き入れられる。

この十五の石のどれかに、小太郎〇二郎と、名が彫り込まれてあるそう。兄弟であらうか。多分この庭を、自ら手を下して作つた人の名前であらう。許されて、彫つたのであらうか。それともそつと、人知れずそつと、彫り残さずには居られない気持で、自分を主張しているものであらうか。

裏庭にまわると、秀吉が朝鮮から持ち帰つたという、佗助（わびすけ）椿がある。その下に庭をくぎる竹垣がある。この組み方を竜安寺垣という。

吾唯知足（吾唯だ足ることを知る）と面白く彫つた手水鉢がある。水戸光圀が寄進したものといわれる。

大仙院の庭 制作、室町末期、

大仙院は大徳寺の塔頭（たつちゆう）で小さい寺である。低いお縁から坐つて見る小さな庭。庭石は水成岩であらうか、ひすいのような色をしているものもある。大小の岩の色々。その岩で描いた水墨画である。枯山水の庭。岩のオーケストラといおうか。やはりぐつと坐つて見る庭である。

この庭は、見る人によつて、かなり好きぶすきがあるような気がする。